

モリエールとルイ 14 世

— 1661 年の転機 —

江 花 輝 昭

1. 文化の中心としての王

17 世紀フランスの社会は、王とその宮廷を中心として構造化されていた。社会から独立して文化が存在するわけではないから、文化もまた社会構造をモデルとして組織される。

この文化においては、ルイ 14 世が物事を中心にいる。宮殿や公共の広場の設計図、つづれ織りや絵画の素描、祝祭や儀式的構成が、われわれに絶えずそのことを思い起こさせてくれる。しかしながらそれは、幾何学的図形のような慣習的で静的な中心ではない。命令し、従わせることを望む、推進力を具えた中心である¹⁾。

この文化の中で生まれ育った者は、あらゆる機会を通じて王がすべての中心にいることを認識させられ、それを自然なこととして受け入れる。文芸作品もまた、そのような意識の持ち主たちによって担われ、そもそも文芸は同時代の社会構造を反映させずにはおかぬものであるから、当然のごとくそこにおいても、王は中心的な位置を占めることになる。社会構造の反映の必然的な帰結として、作品のジャンルにおいても主題においても〈高貴なもの〉（王侯・貴族に関わるもの）と〈低俗なもの〉（町人・農民に関わるもの）との差別が生じ、無論のこと〈高貴なもの〉が〈低俗なもの〉の上に位置づけられて、文芸作品の主流となる。なかんずく〈高貴なもの〉の代表格であり、17 世紀に最盛期を迎えたジャンルである「悲劇」la tragédie においては、王権をその主題として、あるいは隠されたモチーフとして劇が展開されるのが常である。原則として悲劇の主人公は、神話的英雄ないし歴史上の王侯・貴

族でなければならず、同時代の人間を直接登場させることは不可能であったが、それが王権を主題としている限り、現実の王とまったく関わりを持たずにいることはできない。ましてや当時のエリート階級の人々は、文芸作品の至るところに現実への〈ほのめかし〉allusionを見出そうとする習性を持っていた。このような感性は、特に宮廷祝祭の経験を通じて育まれたと考えられる。

古典主義の文学、特に悲劇は、絶えざるほのめかしを助長し、必要とあらば、存在しないところにまでそれを探すことを観客に促す〈寓意主義〉allégorismeに支配されている。一人の王を舞台に登場させておいて、フランス国王と何らかの関わりがある（心理的類縁性とか状況の相似とか、逆にまったくの対立的存在としてとか）と観客に考えさせずに済ますことは不可能であった。一連の神話的人物（ユピテル、アポロン等）や歴史的人物（アレクサンドロス、カエサル等）は、不可避免的に現実のフランス国王を想起させた。〔……〕王政と演劇との間には、〔悲劇は王侯・貴族を扱うものであり、絶対王権はそもそも劇場国家的な政体であるというふうに〕あらかじめ定まった一種の協調のようなものが存在した。王権、とりわけ、礼儀作法や〈盛儀〉magnificenceを通じてルイ14世が組織したそれほど演劇的なものはなかった。〔……〕その演出（威厳を持った身振りで呼ばれたり追い払われたりする衛兵）においても、言述においても、思考においても、悲劇はほとんど途切れることなく王権の神秘学を発展させていったのである²⁾。

当時の作家たち自身も、上記のような事情を確実に意識しているのが通例であり、王へ自作を献呈する場合などには、献呈辞の中で、歴史上の英雄や神話的人物と国王とがごく自然に結びつけられた³⁾。

このように、もともと王は、絶対王政下の社会・文化におけるその存在の大きさゆえに、あからさまな形にせよ、秘められた形にせよ、常に文芸作品の主要モチーフの一つであり続けたと言えるが、王権がその体制を強化し、いよいよ強大になっていくにつれて、権力の中心であり、文化の中心でもある王のイメージもまた次第に膨らんでいき、好むと好まざるとにかかわらず、同時代人の精神に重くのしかかっていくようになる。文筆家も例外足りえるはずがなく、このような現実とまともに向かいあわざるをえない。結局これもまた絶対王権の進展に並行する現象であったと言えるが、こうしてと

りわけ 17 世紀後半のフランスにおいて、国王・王権を巡る言説が花盛りとなる土壌が形成されていくことになる⁴⁾。

とはいえ、ルイ 14 世に関して、上記のような状況がその治世初期からすでに完全な形で定着していたとは到底言えないだろう。10 代の頃にはいわゆる「フロンドの乱」la Fronde が起こり、王権は一時重大な危機にさらされたりもしたのだから。彼の国王としての威光は、親政を開始した後に初めて十全たる輝きを放つようになるのであって、その意味で、70 年以上にわたるルイ 14 世の治世において、1661 年という年は転機の年として特別な重要性を帯びている。

2. ルイ 14 世親政を開始する

1661 年 3 月初旬、宰相マザランは死の床にいた。彼の気がかりは自分の一族の行く末と、営々と築き上げてきた莫大な私財が今後どうになってしまうのかということだった。彼が子孫に残した遺産の総額は 3,500 万リーヴルにも上ると言われている（かのリシュリユーでさえ遺産総額は 2,240 万リーヴルほどであった⁵⁾。それにしても、どうやってマザランはこれほどの資産を蓄えることができたのだろうか⁶⁾。

彼の資産は、リシュリユーの推薦によりその後を継いで宰相に就任した 1642 年から亡くなる 1661 年までの 20 年弱の間に、その大部分が形成されたものである。尋常な手段で到達しうる資産額ではないが、それは当時の官僚層にとっては半ば常識であったとも言える、いわゆる〈公私混同〉の結果として生み出されたものであった。すなわち、マザランは自分の金庫と国庫との間に明確な区別を設けなかったのである。かくして、マザランの金庫が金貨で溢れかえていたのに対して、国庫はほとんど空っぽという悲惨な状況が生じていたのであった。

死期を悟ったマザランは、当時自分の財務監督官を務めていたコルベールの入れ知恵に従って、一か八かの賭けに出る。3 月 3 日に臨終の聖体を拝領すると、彼は全財産をルイ 14 世に遺贈する旨の証書を提出したのである。これを聞いたルイ 14 世は、3 日間逡巡した後にその受け取りを拒否する。王の胸の内はさぞかし複雑だったことであろう。マザランが蓄えた理解し難いほどに莫大な私財のいかかわしい起源について、彼が無自覚であったはずはない。十分すぎるほどの情報が王のもとに届けられてもいた。しかしマザランは、ルイ 14 世にとって父親代わりであり、母親の親密な（親密すぎる？）

友人であり、家庭教師であり、結婚の仲介者でもあった。その存在はあまりにも大きく、それを否定することは王にとって極めて困難な業だったと推測される。「ウェストファリア条約」および「ピレネー条約」を締結することでフランスに安寧をもたらしたのは、外交上手として知られたマザランであった。オーストリア・スペインの両ハプスブルク家から覇権を奪い、ブルボン王家のヨーロッパ的優位を確立したのも彼だった。フロンドの乱を最終的に鎮圧して王権を危機から救い、逆にそれを強化する道筋をつけたのも彼である。宮廷バレエを始めとする公式行事に王を参加させ、王としての立ち居振舞いを教育したのも彼である。また、ルイ 14 世をしばしば戦いの場に連れ出して作戦立案に立ち会わせたり、国务会議に臨席させたりして経験を積ませたのも彼である。時には自室に呼んで教訓を垂れ、ルイ 14 世に帝王学を授けて一人前の国王に仕立てあげたのは、実にマザランその人なのであった。おそらくは王にとっての初恋の相手だったマザランの姪マリー・マンチーニとの恋愛沙汰の一件を除き、一度も逆らったことがないほどルイ 14 世はマザランを恐れ、また敬愛していた。代父にして恩人でもあるマザランを断罪することは、ルイ 14 世にとってほとんど不可能な企てであったと言える。結果として、マザランに対するルイ 14 世の抑圧されたコンプレックスの矛先は、後に別な方向へ向かわざるをえないだろう。

3 月 9 日、マザランはついに息を引き取った。ルイ 14 世はマザラン死去の知らせを聞いて、人目もはばからず号泣したという。しかし、同時に彼はある種の解放感を味わっていたのではないか。翌 10 日の早朝 7 時、王は直ちにマザランの居城であったヴァンセンヌ城で国务会議を招集し、以後宰相は置かず自ら政務を司ることを宣言する。一説によれば、それもまた、宰相を置くことは危険を伴うというマザランの助言に従った結果だとも言うが、確証はない。当日の様子を、会議に出席していた国务卿ロメニー・ド・ブリエンヌは次のように伝えている。

私たちは 8 人だった〔……〕。王は帽子を取りそれを置くと、椅子の脇に立ったまま大法官（ピエール・セギエ）に言葉をかけた。「大法官殿、他の大臣や国务卿とともにあなたを招集したのは次のことを告げるためです。これまで私は、亡き枢機卿殿（マザラン）に私の政務を委ねてきました。今や私自身が政務を司る時です。私の求めがあった場合には、助言によって私の手助けをしていただきたい。〔……〕大法官殿、私の指示を通じてでなければ、国务卿が私の代理としてあなたに持参するも

の以外に、いかなる政令にも私に報告することなく璽を押すことのないように。これはお願いでもあり命令でもあります。」

〔……〕

それから王は、私たちの方を振り返ってこう告げた。「國務卿の方々、保護命令書であれパスポートであれ、私の命令なしにいかなるものにも署名することをあなた方に禁ずる。あなた方は毎日私のもとへ報告に来るように。そしていかなる者にも優遇を与えることのないように〔……〕。そして財務卿殿（フーケ）、すでに私の意志はあなたに説明しました。亡き枢機卿殿が私に推薦してくださったコルベールを任用するようお願いする〔……〕。」それから王は付け加えた。「舞台の姿は変わろうとしています。国家統治においても財政運営においても対外交渉においても、私は亡き枢機卿殿とは違った原則を持っています。あなた方は私の意志を知りました。今やそれを実行するのはあなた方です。」王はそれ以上何も言わず、國務會議は散会した⁷⁾。

ルイ 14 世自身は、王太子のために書き残した『覚書』の中で、宰相を置かないという彼の決定に関して次のように説明している。

私の職務を補佐すべき人間については、どんな物事に関わるものであれ、私は宰相を置かないことに決めた。〔……〕その名称はフランスにおいて永久に廃されるであろう。一方にあらゆる職務をこなす者がいて、他方にただ王の肩書を持つだけの者がいるのを見るほど恥ずべきことはないからである。その目的を達成するためには、すべてを唯一人に委ねることなく、私の信頼と私の命令の執行を分配し、それぞれの様々な才能に応じて様々な仕事を様々な人間に割り振ることが必要であった⁸⁾。

上記の文章にも、ルイ 14 世のマザランに対するアンヴィバレントな感情が反映されているのを見ることができる。

ともあれ、ルイ 14 世が親政を宣言すると、フロンドの乱の記憶がまだ生々しく残っていた人々は、新しい時代の到来を感じてそれを熱狂的に賛美した。しかし同時に、王の政務能力に関してまだ疑念を持つ人々が少なからず存在したのもまた確かな事実である。それまでマザランの陰に隠れていた王は、政治的な経験不足と無気力とを疑われていた。マザランの亡霊を追い払

い、マザラン無しで自立した政務能力を発揮できることを、ルイ 14 世は証明しなければならなかった。王はそれを証明するために全力を尽くすことを自らに誓う。彼は、親政宣言をした直後のことを後に振り返って次のように述べている。

私はまず国のあらゆる部分に目を配ることから始めた。それも無関心の目ではなく、主人としての目を向けたのである。するとそこに、手を付けることを私に促し急がせないような物事が何一つ見つからないことに私はひどく心を動かされた。〔……〕至るところに混乱がはびこっていた⁹⁾。

ルイ 14 世は当初の誓い通り、毎日休みなく複数の国务会議に出席し、王国のあらゆる物事に関心を配るという自らに課した任務を、1715 年に亡くなるその日まで弛むことなく励むことになるだろう。そうした努力のさなか、彼自身の中に確かな変化が生まれてくる。

私は、自分の精神と気力が高まり、自分がすっかり別人になるのを感じた。自分の中に私自身知らなかったものを見出し、喜びとともに、あまりにも長い間それを知らないままだったことで私自身を責めた。少し判断力を働かせる際に生じる最初のためらいは、とりわけ公の場でしばらく話をしなければならぬときに当初私を苦しめたが、そのようなものはたちまちのうちに消え去った。その時ようやく、私は王であり王となるべく生まれたのだということが実感できた¹⁰⁾。

ルイ 14 世は、この時初めて真の王となったのである。以後ルイ 14 世は、名実ともに王国の政治的中心として、また文化的中心としての地位を確かなものにしていくであろう。

親政開始直後の王は、様々な難問に直面した。そのような状況下にあって、彼が最初にもっとも情熱を注いだ企てとはどのようなものだったのだろうか。それは、まず何よりも〈スペクタクル〉だったと言える。1662 年が明けると、宮廷バレエをさらに振興させるべくルイ 14 世は、「王立ダンスアカデミー」Académie royale de danse の設立準備を命じ、3 月 30 日にはその設立を認可する勅許状に署名している。また、大規模な宮廷スペクタクルの開催を目論み、周到な準備期間を経て、同じく 1662 年 6 月にルーヴル宮とチュ

イルリー宮の間に位置する広場で「ルーヴル騎馬パレード」Carrousel du Louvre の開催にこぎつけている。これは、王が主催した最初の大規模な宮廷祝祭となった。この騎馬パレードについて、ルイ 14 世自身は『覚書』の中で次のように述べている。

宮廷人にわれわれと作法に則って親しむ機会を与えるそれら楽しみのための集まりは、言いようもないほど彼らの心を動かし、魅了する。一方、民衆もまたスペクタクルを喜ぶ。[……] 一般にわれわれの臣民は皆、彼らが好むもの、彼らがもっとも得意とするものをわれわれも好むのを見て大いに喜ぶのである。[……] 上記のような考察の主題を私に与えてくれた騎馬パレードは、当初軽い楽しみのつもりで計画されたものに過ぎなかった。だが、次第に熱がこもってきて、催し物の数においても、衣装の新奇さにおいても、紋章の多様さにおいても、かなり大規模で壮麗なスペクタクルとなった。[……] それ以来ずっと保持してきた紋章〔太陽〕を、私が初めて採用したのがそのパレードにおいてであった。個々の細かい点に触れることはしないが、その紋章はいわば君主の義務を表したものに相違なく、私が生涯熱意をもってそれらの義務を果たすことを促すはずのものであった¹¹⁾。

スペクタクルの政治的効果に対して、ルイ 14 世がすでに自覚的であったことが上記の文章からうかがえる。絶対王政の確立過程において、宮廷スペクタクルは極めて重要な役割を果たすことになるが、マザランの指南のもと 1650 年代に、宮廷バレエへの積極的参加を通じて表象操作がもたらす観客に対する圧倒的な威力を理解して、政治権力の本質は想像的なものであるという直観を得ていたルイ 14 世は、スペクタクルのシナリオという想像的なものを通して現実を組織するという企てに着手したのである。一種の「文化的プロパガンダ」の実践と言ってもよい。

しかし、こうした大規模な宮廷スペクタクルが開催可能になる以前、ルイ 14 世は喫緊に打開を図らなければならない問題を抱えていた。それは宮廷スペクタクル開催の前提ともなる、言わずと知れた国家財政改善に関わるものであった。

3. 財務卿フーケの栄光と没落

ルイ 14 世が親政を開始した当時、国庫は重大な危機に瀕していたと先に述べた。その責任は誰が負うべきだったのか¹²⁾。

マザランが亡くなった直後の国务会議に、財務卿として出席していたのはニコラ・フーケだった。彼はすでに 1653 年以来その地位にあった。フーケが財務卿の地位を得たのは、フロンドの乱における彼の働きをマザランが評価した結果であった。フロンドの乱末期、国外逃亡を強いられていたマザランがパリへ帰還できたのは、パリ高等法院主席検事であったニコラ・フーケの尽力に負うところが大きい。その働きに対する感謝の気持ちを表すため、1653 年 2 月、まだ多くの地方がコンデ公を支持していた時期に、マザランは彼に財務卿の職を委ねたのである。財務卿としてのフーケは、いつ終わるとも知れない対スペイン戦争の費用を賄うために急場しのぎの策を用い、人頭税に頼って農村地帯を疲弊させもした。マザランがピレネー条約の締結によりようやくこぎつけたのは、こうした代価を支払ってのことだったのである。しかし、その結果としての国庫財政の破綻は、ただ財務卿に責任をかぶせて済ますべきものだったのだろうか。そんなはずはない。確かに、財務卿就任以来フーケの個人資産は膨れ上がる一方であった。しかしフーケは、マザランが行っていた国庫と自分の金庫とを混同するというやり口をより小規模に行っていたに過ぎない。借金だらけの国庫、徴税システムの混乱があった一方で、マザランが蓄えた私財の額は途方もないものであった。国庫財政窮乏の責任は、フーケ以上にマザランに帰すべきものだったことは明らかである。

マザランの死の直後、親政に乗り出したルイ 14 世は、莫大な借金の存在と国家財政が破産状態にあることを知らされ、同時にマザランが尋常ならざる私財を蓄えていたことを教えられる。その告発者は、誰だろうマザランの財務監督官であったコルベールだと言われている。コルベールは、フーケの不正蓄財についても王に情報を伝えた。言わばマザランの片棒担ぎであったコルベールにとっては（コルベールが財務監督官に就任して以来、マザランの資産は何倍にも膨れ上がっている）、マザランの身代わりとしてフーケを差し出すことが自己保身の唯一の方法だったのだと思われる。まるで司法取引を求めるかのような手口で、自分がいかに有用な人物であるかということを王に売り込んだらしい。一方『覚書』によれば、不正蓄財の情報があいな

がら、親政開始の後もフーケを國務會議のメンバーとして留めたことについて、ルイ 14 世は次のように説明している。

フーケについては、その時すでに彼の窃取は私の知るところであったことを聞いて、それでも私が彼を使おうとしたことは不思議であると人は思うかもしれない。しかし、彼には才覚があり、国の内政を知悉していることを私は把握していた。だから私は、彼が過去の過ちを告白し悔い改めるのであれば、よい奉公をしてくれるであろうと考えたのである¹³⁾。

まるで『タルチュフ』第 5 幕で言及される「国王」のオルゴンに対する態度のようであるが、結局のところ、ルイ 14 世はフーケとコルベールを天秤にかけ、最終的にコルベールを選んだのである。好き嫌いの問題ではない。そこには冷徹な政治的計算が働いていた。フーケと異なりコルベールは、その官僚としての存在のすべてをルイ 14 世に依存していた。彼のほうが王の行動、決断の障害になる可能性が低いという判断が働いたのであろう（そして実際にそうだった）。マザランを罰することができなかったルイ 14 世は、その分も含めてフーケを断罪するしかなかった。財務監督官としてマザランの蓄財状況を知悉していたコルベールにとっても、自分が生き残るためにはフーケを身代わりとして差し出す必要があった。フーケは、完全に己に従属する人材を求めているルイ 14 世の思惑と、自己保身ならびに社会的上昇を願っていたコルベールの画策の犠牲者となったのである。王のフーケに対する態度の急変もまた政治的配慮によるものであり、国家理性の名のもとにおいて、ルイ 14 世はいわばフーケをスケープゴートに仕立てあげて排除し、不可侵の「父」マザランの記憶を保全したのである。

9 月 5 日フーケは、ナントにおいて王の命を受けた銃士隊長グルタニャンによって逮捕された。罪状は公金横領ということであった。その日はルイ 14 世の誕生日であり、あたかも王としての第二の誕生を期するかのよう、象徴的な意味合いを持たせるべく選ばれた日付のようにも見える。この逮捕劇は、世間から熱烈な歓迎を持って受け入れられた。ルイ 14 世にとっては、彼の政務能力に対する世人の不安を一掃する華々しい示威行動となった。フーケは、数十年来忌み嫌われていた塩税を始めとする徴税政策を体現する人物と見なされ、国庫財政乱脈状態の責任者とされたのである。フーケは、混乱に満ちた過去の穢れを一身に負われ、新時代を開くための生け贄とさ

れた。

逮捕される前月の8月17日、フーケは、その趣味と財力のすべてを注ぎ込んだとも言えるヴォー＝ル＝ヴィコント城の落成に際して、この上なく豪華な祝祭を催し、そこにルイ14世を招待した。一説によれば、この祝祭の身の程をわきまえぬ豪華さと洗練にルイ14世は苛立ち、嫉妬心を募らせたことがフーケ没落を招いたと言われる。確かにその祝祭は、フーケ没落を早める直接のきっかけとなった可能性はある。しかし、ルイ14世の言を信じるならば、フーケの逮捕はすでに5月には決定していたのである。王がフーケをすぐに逮捕させなかったのは、彼が財務卿であると同時にパリ高等法院主席検事の座にあったからだ。おそらくはコルベールの示唆があったのであろう、フーケが主席検事の職を売却するまで王はじっと機をうかがっていた。そしてヴォーの祝祭の直前、8月12日に、それが自分の身を滅ぼすきっかけになるとも知らず、フーケはその職を手放してしまう。

なぜフーケは、我が身の没落を招いたとも言える主席検事職売却の愚挙を犯したのであろうか。陰にはやはりコルベールの策謀があったらしい。フーケは若き王の野望を過小評価し、王の経験不足と無気力につけ込んで宰相になる望みをあくまで捨てなかったと言われる。兼職の問題から、宰相になるにはまず主席検事の職を手放すことが必要だとの甘言に釣られ、状況判断の甘さもあって、フーケは自ら墓穴を掘るような行為に走ったのである。

4. ヴォーの祝祭と『うるさがた』

フーケは自らに迫る身の危険を感じていなかったのだろうか。そんなことはない。そのことに関する情報は、いろいろな方面から彼のもとに届けられていた。国王の側近の中にも彼に情報を送るスパイが潜んでいた。フーケは、彼に対する陰謀のすべてに通じ、コルベールが王に毎日新しい弾劾書を提出していたことさえ把握していた。のみならず、彼が情熱を込めて準備していた祝祭が極めて危険な企てであり、彼の破滅を望む人たちが、その開催を口実にしようと待ち構えていることも知っていたのである。しかしそれでもなお、あえてフーケはヴォーでの祝祭を執行する。フィリップ・ボーサンは言う。

1661年8月17日、財務卿フーケは、完成したばかりのヴォー＝ル＝ヴィコント城で豪華な祝祭を催した。彼はそれによって王を幻惑しようとし

たのだが、我が身の破滅を招くことになった。それは、おそらく歴史上もっとも美しい祝祭であっただろう。ヴェルサイユでのルイ 14 世がこれほどまでの完璧さに到達できたかどうか、蕩尽と趣味の正確さをこれほど巧みに配合しえたかどうか、疑わしい。〔……〕この幻想の宮殿では、栄光と切迫した破局とが隣接していた。〔……〕別の時代であったなら、苦境に陥った大臣がまだあれだけの権力を握っていたとしたら（国家装置全体が資金不足に陥るには、彼が金の算段を数週間ストップするだけで十分であった）、何らかの政変を引き起こしていたであろう。〔……〕とんでもない。フーケは、他のいかなる輝きよりも祝祭のそれを選んだ。彼が必要不可欠の人材であると王に納得してもらう手段として、王を招待してヴォーで 10 時間過ごしてもらい、その輝きで王を幻惑することしか思いつかなかったのである。私は、まがい物の星で粉飾され、ベンガル花火で彩られ、幻日に照らされたあの夜ほど純粹に、また完璧に〈バロック〉が正体を見せた瞬間を知らない。そこでは、身の破滅を自覚した一人の大臣が、蕩尽の限りを尽くして、自分が何者であるかを世間に示そうとしたのである¹⁴⁾。

ボーサンはここで、ヴォーの祝祭が〈バロック〉の典型的な発現であったと述べている。フーケは徹底した〈バロック〉の人間であった。〈バロック〉の人間とは、ボーサンの定義によれば次のようなものだ。

バロック的人間とは、〈実体〉と〈外見〉とが混同されて一体となっている者のことである。人はそのように見える者であり、そのように見える者でしかない。「才能があるだけでは十分ではない。それを売り込み、引き立たせる術をわきまえている必要がある」（ニコラ・ファレ）。裸の人間とは何か。それは人間ではない。人間の尊厳に近づくためには衣装を身につけなければならない。衣装の役割とは、覆い隠したり暖かくしたりすることではなく、飾ることにあるのだ。〔……〕人間の尊厳は、自然を磨きそれを飾ることにある。自然が歩くことであれば、バロック的人間は踊り、自然が話すことであれば、バロック的人間は雄弁であろうとする。〈バロック〉は〈真実〉がすっかりむき出しになるとは思っていない。〈真実〉にも飾りが必要だからだ¹⁵⁾。

フーケは、どうにも進退が窮まったと感じられたそのとき、途方もない金

が蕩尽されたあの晩に、〈実体〉を補うには〈外見〉を増大すればいいと考えた。その気違いじみた豪華さの見せびらかしは、彼にとっては理にかなった行為だったのである。しかし彼は、1661年におけるルイ14世の親政開始以来新たな国家的展望が開けつつあり、王政が転機を迎えていることをついに理解しなかった。バロック的人間としてのフーケは、王に肩を並べるほどの豪華なもてなしが王に対して威力を発揮することを、あくまで信じて疑わなかったように見える。しかし祝祭の陰では、コルベールが着々とその隙を突く策謀を推し進めており、最終的にフーケを破滅に陥れることに成功するのである。

ヴォーの祝祭を迎える時点で、ルイ14世の心中でフーケを断罪することが既定路線となりつつあったことは事実だが、それでもヴォーの祝祭の衝撃は、王にとって想像以上のものであったらしい。ヴォーのたたずまいが、当時滞在していたフォンテーヌブローや他の王宮よりもはるかに豪華で洗練されており、そこでの祝祭が、王が今までに経験したどの宮廷祝祭よりも壮麗で趣味の良さを見せつけていることに驚愕したルイ14世は、ヴォーの祝祭からフォンテーヌブローに帰る途中の馬車の中で、母后アンヌ・ドートリッシュに向かって、顔面蒼白になりながら、「あの連中が不当に得たものを吐き出させてやりましょう」と言ったと伝えられる¹⁶⁾。許し難いのは、公金横領の罪よりもフーケの王の如き振舞いの方であった。それを許したままにしておくことは、王の尊厳に関わる。自分はまだ何も成し遂げておらず何も造り出していないのにフーケはどうだ、という忤怩たる思いが、ルイ14世にフーケ逮捕を急がせることになる。

ヴォーの祝祭からちょうど3年後の1664年8月、ルイ14世はヴェルサイユにおいて、『魔法の島の楽しみ』*Les Plaisirs de l'Isle enchantée*と題された大規模な宮廷祝祭を催す。彼が主催することになる壮麗な宮廷祝祭の嚆矢となるものであった。この祝祭が、フーケ裁判の最終段階と時期的に一致していたのは偶然だろうか。まるでヴォーの祝祭はそのための草案にすぎなかったかのよう、ヴォーの祝祭を上書きし、その存在を人々の記憶から抹消しようとするかのよう、基本的構図はそのまま、ヴェルサイユの祝祭はヴォーの祝祭をより大規模に、より豪華に発展させたものとなっている。建築家のル・ヴォー、造園家のル・ノートル、画家のル・ブラン、作家のペリッソン、劇作家のモリエール、バレエのボーシャン、舞台装置家のトレリなど、両祝祭を担当した作家・芸術家たちも実は同一なのであった。その一方で、祝祭の想像力という点においては、フーケは逆にルイ14世を

征服し虜にしたのだとも言える。ヴォーの祝祭に王は心を奪われ、夢見心地となり、いつかは自分もという思いを密かに育んできたのではないか。親政開始から十数年にわたって、祝祭に次ぐ祝祭の開催が、ルイ 14 世の企ての大部分を占めることになる。

ルイ 14 世は、フーケが極刑に処せられることを望んでいたと言われる。しかし、彼を裁く特別裁判所の席で、報告評定官ルフェーヴル・ドルメソンは、王の逆鱗に触れることを覚悟の上で死刑判決に反対する意見を述べた。大半の判事も彼の意見に従った。フーケは追放刑に処せられるはずであったが、ルイ 14 世は自らの意思でその判決を破棄して量刑を重くし、彼に終身禁錮を言い渡す。フーケは、奪還を恐れた王の命によって秘密裡にピエモンテ州にあったフランスの飛び地ピニユロル（ピネローロ）城塞に移送されて、1680 年に亡くなるまでその地で幽囚の時を過ごした。

ルイ 14 世にここまでの嫉妬心と憎しみを覚えさせたフーケは、途方も無い資産家で財務卿であるというだけの人物ではなかった。彼は知性に優れ、豊かな教養の持ち主で（この点がルイ 14 世と異なる）、趣味の良さという点においても衆目の一致するところであった。フロンドの乱以降、フーケは王国でほとんど唯一と言ってもよい文学・建築・芸術の大パトロンであり、その点においては、フランス人になりきれずイタリア趣味の過ぎたマザランをも凌駕していた。結果として、フーケの周りにはフランスでもっとも才能にあふれた文学者・技術者・芸術家たちが集うことになった。ラ・フォンテーヌなど若干の例外はあるとしても、ルイ 14 世がフーケの取り巻きであったそれらの者たちを、そっくりそのまま自分に奉仕させるべく採用したという事実が、フーケの目利きとしての能力を証明している。中でも、文学・芸術サークルの中心人物であり、「ガラントリーの美学」*Esthétique galante* の推進者でもあったポール・ベリッソンは、ヴォーの祝祭の企画立案者であり、シナリオ作家でもあった。

おそらくはそのベリッソンの推薦により、モリエールもまたヴォーの祝祭に参加していた。参加を要請されたということはとりもなおさず、フーケの周囲におけるベリッソンを中心とした文学・芸術サークルへの参加を促されたのと同じことだった。モリエールは、千載一遇のチャンスとばかりにその要請に飛びついたはずだ。ルイ 14 世を除けば、当時フーケほど気前のよいパトロンはいなかったからである。

確かにフーケの金払いはやかった。モリエール的一座が最初にフーケの館で訪問公演を行ったのは、1660 年末（10～12 月）のことである。演目は、『粗

忽者』*L'Étourdi* および『スガナレルあるいはコキュ妄想』*Sganarelle ou le Cocu imaginaire* であった。それまで使用していたプチ＝ブルボン劇場が突然に取り壊され、新たに王から貸与されたバレ＝ロワイヤル劇場が開場する間、訪問公演のみを行っていた時期である。同時期に訪問公演を行った他の貴族等が150～330 リーヴルを一座に支払ったのに対して、フーケは破格の500 リーヴルの報酬を支払っている¹⁷⁾。これを上回るのはただルイ14世のみであった。

1659年末初演の『笑うべきプレシウズたち』*Les Précieuses ridicules* の大成功以後、モリエール一座の人気はうなぎ上りで、宮廷を始めとする訪問公演の数も次第に増えていった。ヴォーの祝祭の前にも、ルイ14世とフーケは互いに争うかのようにモリエール一座を館に招いて芝居を上演させている。7月11日、モリエールの一座は祝祭に先駆けてヴォーを訪問し、『亭主学校』*L'École des maris* を上演。7月13日、フォンテーヌブローで王のために『亭主学校』および『スガナレル』を上演すると、同日ヴォーに移動して同じ演目を上演。翌7月14日は、フォンテーヌブローに戻って『亭主学校』を再び演じている。いくら実入りがいいとは言っても、かなりの強行軍である。この後一座は一旦パリに帰るが、8月15日には、ヴォーの祝祭準備のため、またフーケの館に赴いている。そして、8月17日、ヴォーの祝祭で初演されたのが、『うるさがた』*Les Fâcheux* であった。恋人と行き違いがあつて、早く彼女と合流したがっている若い貴族の前に、次々と奇妙で滑稽で煩わしい連中が現れてそれを邪魔するという単純な筋立ての喜劇だが、幕間にはバレエが挿入され、モリエールにとって、最初のコメディ・バレエの試みと言えるものであった。モリエールは、1662年2月に出版された『うるさがた』序文において次のように語っている。

舞台において、これほどまでに性急に物事が企てられたことはかつてなかった。一つの喜劇が二週間で構想され、執筆され、暗記され、上演されたことは前代未聞のことであつたと思う。〔……〕計画としては、バレエも一緒に上演するということであつた。そして、優秀な踊り手の数が限られていたので、このバレエのアントレとアントレの間隔を開けなければならなかった。同じ踊り手が別の衣装で舞台に戻ってこられる時間をつくるため、喜劇の幕間にアントレを配置するという意見が出された。したがって、この種のアンテルメード（幕間舞踊）によって芝居の筋が中断されないように、それをできる限り主題に縫い合わせ、バレエ

と喜劇をただ一つのものにすることを思いついた。〔……〕これは我が国の舞台ではまったく新しい混合であった¹⁸⁾。

コメディ・バレエの誕生が偶然の契機によるものであったことをうかがわせる注目すべき文章だが、モリエールは、明らかにここで自分の役割を少し誇張している。実際問題として、モリエールにそれほど主導権が与えられていたとは考えにくいし、これほどまでに大規模な祝祭の準備が2週間前から始められたとは到底思えない。バレエや音楽（ともにポーシャン）、舞台装置（トレッリ）、祝祭全体の進行（ペリッソン）等については、モリエールが駆けつけた時にはすでに企画がかなり進行していたのではないかと。モリエールは、後から全体を一つの喜劇の主題でまとめ上げることを求められたといったほうが、真実に近いように思われる。特にペリッソンの果たした役割は、モリエール以上に大きかったはずだ。ペリッソンは、舞台装置の描写を含む『うるさがた』の序幕も執筆している。

いずれにせよ、この芝居を観たルイ 14 世は大層それをお気に召して、さらに狩猟マニアの場面を追加するようモリエールに要求したというエピソードが伝えられている¹⁹⁾。モリエールは早速それを書き加え、翌日の再演に間に合わせて大変王を喜ばせたいらしい。王はそれだけでは飽きたらず、8月25日と27日にもフォンテーヌブローで『うるさがた』を上演させている。

後に出版された『うるさがた』は、むしろ狩猟マニアの場面は別として、本当にヴォーで初演されたものと同じなのだろうか。驚くべきことに、注文主であったはずのフーケの影を作品のどこにも見いだすことができない。この種の祝祭用作品としてはほとんどあり得ないことである。この点に関して、出版された『うるさがた』に付された国王への献呈辞は極めて興味深い。そこでは、最初の注文主フーケの痕跡はきれいに消されて、作品はルイ 14 世に捧げられているだけでなく、国王は『うるさがた』の生みの親、さらには作家に靈感を与える存在とも見なされているのだ。モリエールは、王の命によって狩猟マニアの場面を付け加えたことで喜びを感じたと礼を言った後に、次のように述べている。

万一このような命令によって靈感を与えられるとしたら、丸々一つの喜劇に関しても、私にどれほどのことができるかがわかります²⁰⁾。

これは、「王が発意し臣がそれを形にする」モデルをモリエールが以後い

つでも採用する用意があるという宣言と受け取ることができよう。暗に、宮廷祝祭において何らかの役割を担わせてほしいという申し出であり、献呈辞が受け入れられたということは、モリエールの希望が受け入れられたということの意味する。さらにモリエールは、通例に反して『うるさがた』のパリ市中上演を少し遅らせ、王太子の誕生（11月1日）に合わせて、それを寿ぐかのように11月4日に初演している。

『うるさがた』は、明らかにモリエールの演劇生活にとって転機となった重要な作品である。この喜劇の成功によって、以後モリエールはルイ14世のお気に入りとなり、直接国王に仕える立場となった。国王の命に従って宮廷祝祭を組織する役割を担う可能性も開けてきた。フーケの失脚とともに宮廷から遠ざけられたラ・フォンテーヌなどとは異なり、モリエールは1661年の危機を際どく乗り越え、新たな展望の広がる道を歩むことになる。彼は早速次の機会をとらえて、「王が発意し臣がそれを形にする」モデルに従って、あの驚くべき『ヴェルサイユ即興劇』*L'Impromptu de Versailles* (1663)を書き下ろすことになるだろう。

王のお墨付きをもらったということは、この時代、われわれが普通に想像する以上の意味を持っていた。モリエールはこの時期に、この方向でいいのだという決定的確信を深めたように見える。自分の進むべき道がようやく見えてきたのである。以後、モリエール喜劇の中で勝利する秩序には、常に参照点を見出すことができるだろう。それは、文化的中心としての若きルイ14世が君臨する宮廷社会とその規範である。国王の意図を斟酌する形でモリエールは、新しい規範に敏感なある種のブルジョワのタイプを肯定的に描き、古い規範にしがみついたブルジョワや寄生者の貴族を笑い者にした。その一方で、ルイ14世がモリエールを最良にしたのは、単に笑い好きだったからというのが唯一の理由ではない。王はモリエールの中に、〈若い宮廷〉の推進する新しい秩序を、魅力的な芝居を通じてきわめて効果的に顕揚することのできる人材を見出したのである。ルイ14世は、演劇が持っている社会的秩序維持機能を半ば本能的に把握していた。

当時の一般的な序列意識に照らせば、「低俗な」ジャンルである喜劇しか書かず、さらにはそれに役者として出演までしているモリエールは、下賤な道化、大道芸人のごとき存在と見なされても、ある意味では仕方のないことであった。実際に、モリエールに敵対する者たちは、「単なる笑劇役者」といった侮蔑的名称を浴びせて彼を非難中傷することになるだろう。モリエールは、ヴォーの祝祭の機会を巧みに捉えて、ルイ14世と直接的な〈友情〉

関係を取り結ぶことに（あるいは取り結んでいるように見せかけることに）成功した。王との間に特別な〈友情〉関係があると人々に信じこませるために、モリエールはあらゆる手立てを尽くすだろう。それにより彼は、王以外の臣下からの干渉に対して相対的な自由を獲得することができた。1663 年モリエールは、シャプランの推薦により有力作家として年金下賜リストに入り、年額 1,000 リーヴルの年金を拝受することになった。その際にモリエールが王に宛てて書いた返礼詩が残っているが、そこには、モリエールが王といかに親密で〈気安い〉関係にあるかということが、これでもかとばかりに仄めかされている²¹⁾。

ヴォーの祝祭の 3 年後、ヴェルサイユで催された『魔法の島の楽しみ』の場において、サン＝テニャン公爵の構想に従って祝祭全体を取り仕切ったのは、ほかならぬモリエールであった。そこでは、他のいくつかの作品とともに『うるさがた』が、ヴォーからの戦利品のように上演されることになるだろう。

註

- 1) Zuber, R. et Cuenin, M. (1984), p. 32.
- 2) Truchet, J. (1975), pp. 94, 97-98.
- 3) Ferrier-Caverivière, N. (1981) に数多くの実例が挙げられている。なお、神話的人物と国王との伝統的結びつき、ルイ 14 世治下におけるその変質については Neraudeau, J. P. (1986) も参照。
- 4) 17 世紀の文芸に現れた国王のイメージの諸相については, Colloque de Strasbourg (1983) 参照。
- 5) Dessert, D. (1987), p. 207 参照。
- 6) この点に関しては, Dulong, C. (2002) 参照。
- 7) Loménie, L.-H., comte de Brienne (1828), tome II, pp. 155-58.
- 8) Louis XIV (1978), p. 44.
- 9) *ibid.*, p. 34.
- 10) *ibid.*, p. 41.
- 11) *ibid.*, pp. 134-36.
- 12) 以下の記述については、主として Bercé, Y.-M. (2005), pp. 63-68 に依拠している。
- 13) Louis XIV (1978), p. 47.
- 14) Beaussant, Ph. (1981), pp. 18-21.
- 15) *ibid.*, pp. 22-23.
- 16) Choisy, l'abbé de (1888), p. 136 参照。
- 17) La Grange (1947), p. 28.
- 18) Molière (1971), I, p. 484.

- 19) *Menagiana* (1694), II, p. 13.
- 20) Molière (1971), I, p. 481.
- 21) *ibid.*, I, pp. 631-33.

参考文献

- Beaussant, Ph. (1981), *Versailles, Opéra*, Gallimard.
- Bercé, Y.-M. (2005), *Louis XIV*, Le Cavalier Bleu.
- Choisy, l'abbé de (1888), *Mémoires pour servir à l'histoire de Louis XIV*, Librairies des Bibliophiles.
- Colloque de Strasbourg (1983), Klincksieck (1985), *L'Image du souverain dans les lettres françaises, des Guerre de religion à la Révocation de l'édit de Nantes*.
- Dessert. D. (1987), *Fouquet*, Fayard.
- Dulong, C. (2002), *Mazarin et l'argent, Banquiers et prête-noms*, École Nationale Des Chartes.
- Ferrier-Caverivière, N. (1981), *L'Image de Louis XIV dans la littérature de 1660 à 1715*, P.U.F.
- La Grange, Charles Varlet, dit de La Grange (1947), *Le Registre (1659-1685)*, Droz.
- Loménie, L.-H., comte de Brienne (1828), *Mémoires inédits*, Ponthieu et Cie.
- Louis XIV (1978), *Mémoires*, textes présentés et annotés par Jean Longnon, Tallandier.
- Menagiana* (1694), 4 vol., B. de La Monnoye.
- Molière (1971), *Œuvres complètes*, 2 vol., Gallimard.
- Neraudeau, J. P. (1986), *L'Olympe du Roi-Soleil : mythologie et idéologie royale au Grand Siècle*, Les Belles Lettres.
- Truchet, J. (1975), *La tragédie classique en France*, P.U.F..
- Zuber, R. et Cuenin, M. (1984), *Littérature française*, t. 4, « Le classicisme (1660-1680) », Arthaud.